

震災関連記事のみの抜粋です

中外雑記

天台

「災難に逢時節には」

▽瀬戸内寂聴さんは、公共広告機構のコマーシャルにも出演して、兵庫県南部地震で被災した人々に対し励ましの声をかけている。寂庵（瀬戸内寂聴住職、京都市右京区嵯峨鳥居本仏餉田町七ノ一）発行の機関誌『寂庵だより』に寄せた随想にも地震について触れている。良寛の書簡の中から、「地しんは信に大変に候 野僧庵八何事なく親るい中 死人もなく めで度（たく）存候 うちつけにしなばしなずてながらへて かゝるうきめをみるわびしさ しかし災難に逢（あう）時節には 災難に逢がよろしく 死時節には 死ぬがよく候 是ハこれ災難をのがるゝ妙法にて候 かしこ 良寛」を引用し、－今更のように良寛の地震の手紙を読み直し、今、老荘思想の影響を受けた良寛の諦念にようやく共感がわいてきた。諸行無常と人間の非力さをつくづく思い知らさる－と良寛の境地に想いを致し、地震を通じて初めて実感できた良寛の心理について記している。

臨黄

犠牲者供養は宗派主催で

●妙心寺派 十一日付本欄で報じた兵庫県南部地震犠牲者の月忌法要が有志寺院ではなく、本派の行事として実施されることになった。供養の諷経が行なわれる場所は既報の通り、JR鷹取駅から新長田駅を経て兵庫駅へ至る地域。特に、鷹取～長田間は震災と火事で壊滅的な被害を受けており、その辺りで一行は二班に分かれて被災地を歩き、犠牲者を弔う花が供えられている場所などを目印にして諷経を行なう。本山からは羽賀文圭総務部長ら十人が参加する予定

▽愛知西教区（一色宏襄所長）は十五日、震災被害救援の義援金として教区内で募金した五百万円を被災地の兵庫教区（大西道裕所長）に送った。教区寺院住職、寺庭婦人、花園会員、無相教会会員を対象に実施した募金四百八十八万三百円と教区特別会計から上乗せ分を加えたもの。宗務本所が呼びかけていた被災者義援金が「募財締切や使途がまだ明示されておらず、募金がいつ、どのような形で分配されるか不明である」（一色所長）ため、被災教区に直接送ることにしたという。兵庫教区は同教区で独自に集める義援金とともに、七割を被災寺院に、三割を花園会員に振り分ける方針と愛知西教区に説明している、とのこと。「宗派エゴという批判も聞いたが、相互扶助の立場から被災寺院の復興を支援するという趣旨に賛同した。義援金窓口は他にも多くあるし、誰かが支援しなければならない」と一色所長は語っている。

古黄檗から震災見舞い

●黄檗宗 中国・古黄檗から林文照管長宛にこのほど、兵庫県南部地震被災の見舞状が届いた。宇治・黄檗山や末寺、とりわけ阪神地区の寺院の被災状況や古黄檗にとっても縁の深い在日華僑の安否などを問い合わせるととも

に、古黄檗の大衆一同で震災復興の祈禱を行なっている旨、伝えてきたという。これに対し、林管長は震災の被害を伝える新聞の写真を切り抜きを同封して、丁重な見舞いに感謝する礼状を送ったとのこと

真言

これまでの反省点も

●**高野山** 全国各地から集まったボランティアは震災地域に分散して、それぞれの任務を遂行している。九日に西宮市の上ヶ原小学校で被災者のために炊き出しを行なった高野山三宝院の関係者の一人として、藤原栄善鷲林寺住職（西宮市鷲林寺町）も姿を見せていた。藤原氏は自坊を含め震災の被害が大きかった地域にまたがる兵庫支所の青年会長をつとめているので、改めてボランティアの現況などについて聞いてみた

▽兵庫青年会については、「多くの寺が被害を受けていますし、青年会単位というよりはそれぞれができる範囲で動いています。ボランティアの手配や道案内などよくやっていると思います」と現況を説明する。そんな中で、「北海道の青年会が随分はやい段階で来てくれた時に、頭をがつんと打たれた思いがしました。北海道では奥尻島や釧路が震災で大きな被害を受けた時、私たちは実際に人を出すことをしませんでした。長崎の普賢岳にしても、今も不自由な暮らしをしている人がたくさんいることを兵庫県南部地震のことでつい忘れがちです。今回の震災を通じて、僧侶としての原点を振り返る意味で本当に勉強になりました」とこれまでのボランティアに対する姿勢を反省した。今後は「やはり救援活動が長丁場になることは明白なので、物資を含め細く長く続いていくよう、団結していかなければならない」と意気込みを語っている

▽藤原氏らと同じく炊き出しのボランティアの中に、高野山大学からの数人も混じっていた。現場のリーダーは、一月末からボランティアに来ているという四回生の金持博智君。伊丹市寺本の正覚院（岡部兼海住職）に泊まりながらの連日の救援活動である。同寺は金持君の他にも、同大学からのボランティア十七人を受け入れている。これらは男子学生だが、女子学生は現在三人が参加しており、大阪市北区の太融寺（麻生弘道住職）に宿泊している。「最初はとにかく慣れなくて大変でした。今は情勢も落ちついてきて、家を失って本当に困っている人に対する救援物資を目当てにしている心ない人も居ますが、その区別はできないので平等に物資を配るしかありません。現場では、意外と女子学生ががんばっています」など現場での苦労の様子を語る金持君は今春からの就職先が未だに決まっていないようだが、今後もボランティアを続けていくという。

宗団義援金のお願い

●**東寺真言宗** 宗団義援金のお願いとして、藤原義章宗務総長から各宗務支所長宛に支所としての目標額などを具体的に明示した依頼が行なわれている

▽依頼書は「この度の阪神大震災は、当東寺真言宗の兵庫県を中心とする各寺院に多大の被害を与え、現在被災寺院では懸命の復旧作業に日夜精励されているところであります。宗団としても、一月三十一日に阪神大震災緊急対策会議を急遽開催し、その対策について協議いたしました。その結果、緊急対策会議として、一月三十一日当日、藤原宗務総長、橋本庶務部長、松下宗会副議長の三名が、夕刻までに現地に向かい、被災各寺院を直接訪問し、とりあえずの見舞金をさしだして参ったところであります。同時に、宗団全体として被災各寺院の実態に鑑み、災害救援勧募金の拠出をまつこととなり、各宗務支所長さんに、そのとりまとめ等について、下欄のとおりご依頼することになりました。諸般の情勢をご賢察いただき、何卒よろしくお取扱い頂きますよう、緊急対策会議委員一同伏してお願い申し上げます」と。勧募一口三万円。各所としての目標額は次のとおり

▽関東百二十万円、神奈川百二十万円、近畿百二十万円、大阪七十万円、兵庫七十万円（神戸市、伊丹市、宝塚市、川辺郡を除く）。中国百八十万円・四国九州六十万円。勧募の締め切りは二月末日。振替用紙で宗務庁へ送金する旨が依頼されている。

地震の被害状況

●**大覚寺派** 同派では兵庫県南部地震発生後、宗務庁に災害対策本部を設置し、被災寺院の見舞いと被害状況の調査を一月二十三日から二十六日までの四日間にわたり行なった。今回訪れたのは被害の大きかった近畿教区の十九カ寺と淡路教区の十四カ寺の計三十三カ寺。このほどその調査結果がまとめられた。それによると近畿教区で最も被害の大きかった地区は、神戸市長田区と須磨区、宝塚市小林であった。長田区の光明教会（榎本基志住職）では寺院が全壊し、須磨区の貞照寺（富永龍心住職）では富永住職が本寺の大本山須磨寺塔頭蓮正院で建物の下敷きになり死去した。宝塚市小林の成福院（今井弘道住職）では山門、本堂、庫裡が全壊。明石市の密蔵院（北川清仁住職）、宝蔵寺（松本大天住職）では庫裡の真下を地割れが走り、建物が持ち上げられた状態となっている。西宮市の一言寺（北野公順住職）は半壊状態。神戸市兵庫区の立江寺（井上紀生住職）では護摩堂が倒壊寸前の状態で、庫裡の内部の壁が傷み、屋根瓦が少し滑り落ちている。また、前門跡の井上住職は左手の小指を骨折した。加古郡稲美町の高蘭寺（浅田覚雄住職）は庫裡玄関の壁が落ち、内部の壁が傷んでいる

▽淡路教区で最も被害の大きかったのは北淡町で、震源地に近い真泉寺（禰宜田龍栄住職）は建物のほとんどが壊滅状態。興久寺（禰宜田龍真住職）では本堂、庫裡が倒壊寸前。海福寺（潮弘憲住職）はほとんどの堂宇が倒壊または大きく傾いている。普濟寺（若林義亨住職）は堂宇が傾き、妙応寺（泉龍雄住職）、宝蔵寺（多田俊諦住職）の両寺は屋根の半分以上が崩落している。福田寺（村田熙住職）では本堂と庫裡が全壊。西念寺（三木格全住職）と正福寺（大西良賢住職）は屋根、土塀、石垣などが崩落した。真正寺では本堂と庫裡の柱が割れた。浄瀧寺（市橋明快住職）、東山寺（廣瀬智香住職）、向月寺（村田熙住職）、松亀寺（平松隆全住職）の四カ寺は壁の剥落や瓦が落ちている。

岩熊住職らが募金

●**醍醐派** 福岡県直方市植木辻九五九ノ一、善覚寺（岩熊覚真住職）では九日、兵庫南部地震（阪神大震災）の被災者救援のために、同市の中心商店街において寒行托鉢を実施し、集まった浄財と地震発生以来、同寺に置かれた募金箱に寄せられた義援金合わせて十九万三千三百六十五円が寄託された。この日、岩熊住職、弟子ら十人が午前十時から午後二時過ぎまで被災者救援を呼びかけるノボリ・チラシを用意して法螺貝を響かせながら、須崎町、明治町、古町、殿町の四商店街を寒行托鉢して回った。各店や通行人からの協力もあり、約六万円が集まった。地震発生以来、同寺の募金箱に参拝者らが寄金した分も合わせて寄託したもので、岩熊住職は「今回の活動は一時的に募金するのでなく継続していく」と述べている。

被災地にお見舞い状

●**御室派** 中国楽寿観音三十三ヶ所霊場第五番札所の佛法寺（岡山県英田郡作東町川北八〇七）の主原啓隆住職は、兵庫県南部地震（阪神大震災）に際して、義援金を募集するとともに、同寺や同住職の関係者に次のようなお見舞い状を送っている。「今般、阪神大震災は淡路島を震源地として、特に同島・神戸市、芦屋市、西宮市、宝塚市など阪神地帯で多数の死傷者・被害者が続出し、その甚大な被害が新聞やテレビで連日報じられています。目を覆いたくなる惨状に、胸が締め付けられる毎日でございます。被害を受けられた方には謹んでお見舞いを申し上げます。各位におかれましてはいかがでしょうか、心より案じております。被害などがございました節には一日も早い復旧がなされんことを至心にお祈り申し上げます。ご様子などお知らせいただければ幸いに存じます。まだまだ寒い日が続きます。お身体を大切にしてお過ごし下さい。誠に簡単ながら、地震被害のお伺いとお見舞いにさせていただきます」と。

山口

托鉢行の浄財を赤十字へ

●**仏教会** 山口市内の仏教各宗派で組織する山口市仏教団（団長・御幡高光曹洞宗妙喜寺住職）＝山口市宮野下江良一五九四、妙喜寺内＝は一月三十一日午後一時から市内二カ所で兵庫県南部地震の災害救援の托鉢行を行ない、集まった浄財約十四万円を郵便局を通して日本赤十字社へ寄託した。今回の托鉢には曹洞宗、臨済宗各派、浄土宗、浄土真宗本願寺派などから十六人が参加。午後一時に市内下堅小路の法界寺に集合。三十分後に出発して午後三時半まで、市内二カ所で托鉢行を行なった。同仏教団ではこれまで長崎水害、普賢岳などの災害に対応して托鉢行を行っており、浄財を被災地へ届けている。

真宗

老骨に鞭打ち復興へ

●**本願寺派** 「このたびの災害は思いのほかきず跡が大きく到底生涯かけても復興がなりますかどうかは心淋しい状態です。老いにむち打って頑張ります」－今回の兵庫県南部地震で被災、本堂が全壊、庫裡も半壊という大きな被害を受けた兵庫教区神戸中組の高法寺の志水紫朗住職（八五）からこのような便りが本紙宛に届いた。神戸市中央区宮本通、阪急神戸線春日野道駅の近くにある高法寺は、今回の兵庫県南部地震により本堂が全壊。また、築十五年と比較的新しい庫裡は外観はそうでもないが、内部の損壊がひどく風呂やトイレは使えない状態で、この混乱の中で秋子坊守が頭部を負傷した。西宮市や神戸市灘区、東灘区などの門信徒も多数が被災し、把握できているだけでも十人の人達が亡くなり、志水住職と副住職が各々葬儀に赴いたという。被災後、志水住職ら寺族は昼間は庫裡の室内で寺務を執り、夜は境内のテントで仮泊して夜露をしのいでいたが、最近では、寒気の強まりでいつ倒壊するかもしれない庫裡の中で危険を犯して就寝するようになったそうだ。本堂は全壊したが、内陣に安置されていた三百年余りを経た本尊は無事で、いま志水住職はこの本尊を守り内陣を修復して、共に今日の災禍をくぐり抜けた門信徒と力を合わせて一日も早い自坊の復興を目指して頑張る毎日を送っている。志水住職は在家の出身。亡き母の勧めで仏門に入り、長く神戸別院に勤務して教化伝道一筋に努めてきた人。今年はその亡母の五十回忌に当たるが、手紙は「せめて報恩の一端にもと復興に一意精進する覚悟を新たにした次第です」と復興へ力強い決意を披瀝して結ばれていた

●**大谷派** ▽「広域災害の救援活動に関する緊急協議会」が十三日、二十一人の宗・参議員、教務所長らを集めて開かれた。ここでは兵庫県南部地震で被災した寺院への共済金の給付方法、ボランティア活動、義援金の取り扱いなどを検討。能邨英士内局も全力を挙げて対応していく方針を示したという。なお、郵便振替、現金で宗務所の兵庫県南部地震災害救援本部（岡川秀映本部長）へ寄せられた善意は、今のところ約六千万円
▽宗議会同和委員会（常盤晃耀委員長）が九、十の両日、開かれた。会では被災した被差別部落出身者や在日外国人、障害者へ特別の支援を求めて、十三日の「広域災害の救援活動に関する緊急協議会」へ申し入れすることに決めた

第一、二山門改修始まる

●**木辺派** ▽兵庫県南部地震で被災した宗門の寺は十四カ寺。全壊したり、前坊守が犠牲になるなどの被害を受けたそうだ。窓岡秀道内局は一月十八日に被災寺院に宗務所、錦織寺名で見舞状を送付。一月二十日には緊急の役員会

議を開いて宗門各寺に義援金を呼びかける趣意書と振替用紙を送付した。

神社界

左義長でも義援活動

●福井県に鎮座する劔神社（緒方教明宮司）で十一日、火の神の守護を感謝する左義長の神事が行なわれた。お火焚祭に相当する同行事は、日本古来の歳徳神信仰と陰陽道および仏教が混合した行事で、五穀豊穰と鎮火を祈って行なわれた。以前は二月十五日に行なわれていたが、現在では同十一日に開催され、門松や注連飾り、古神札を少しだけ早く焚きあげるようになった。当日は緒方宮司の呼びかけで兵庫県南部地震の被災者に対する義援金の募金活動も行なわれ、地元とともに被災地、そして日本全国の平安を祈って祭典が行なわれた

▽緒方宮司は地震の報に接し、一月二十日過ぎに独自に神戸入りした。交通がほとんど寸断されていたため、徒歩での強行軍となったが、「テレビや新聞の報道と、実際に足を運んで実見した様子とは違いが大きかった」と語るとおり、現地の悲惨さを実感、中央区の生田神社を訪れて震災を見舞った

▽神社本庁では、全国都道府県の神社庁を通じて義捐金の募集を大々的に行なっているが、福井県でも一九四八年に福井大地震が起こっており、被災地への関心は高い。緒方宮司は福井大地震の際には同地にはいなかったが、個人として、劔神社宮司として、そして兼務社の宮司として、三者の立場からの支援活動を行なっている。自己の神社についても、「これからは防災用品の用意なども考えねばならない」と、日頃の準備の必要性を感じるようになったという。

大本

信徒大会で大震災報告

● ▽なお大祭に先立ち三日午後三時から白梅殿で開催された「全国信徒・会員大会」は、当初のプログラムを変更し、「阪神大震災報告」と題して開催された。出口尚雄神教宣伝部長の開会挨拶に続いて、救援物資の搬入にあたった大本災害救援奉仕隊の事務局から森良秀宣伝主幹、大本本部からいち早く被災地に入った中里友彦近畿第二教区特派宣伝使がそれぞれ報告。この後、神戸本苑信徒の現地報告として稲村基保神戸本苑長、仲田敬子さんが被災状況や避難所での体験をつぶさに語った

▽教団では被災地の復興に向けて、継続的な支援活動を行なう方針を打ち出している。知野茂樹総長は三日の大祭挨拶の中で、今年の教団行事について次のように述べた。「今年の教団方針にも掲げられております五月三日の教主さまご還暦梅松祭、六月九日の人類愛善会創立七十周年式典等の慶祝行事は、このたびの大震災にあたり、祭典や奉納部門をのぞいて自粛の方向に変更させていただきます。しかし教主さまのご指導のもとお互いが天地のご恩に感謝し、信仰の内実化を深め、本部・地方ともさらなる組織の活性化と充実強化を図る方針は堅持してまいりたく存じます。梅松苑信徒会館の建設も順調に進捗しておりますし、きたる七月には上棟祭を執行させていただく予定です」。

諸団体

“しなぬいのちを”

●一燈園 兵庫県南部地震に際し同園では、地震発生の翌日（一月十八日）に対策本部（本部長＝境台二・一燈園本部当番）を設置し、連日、被災地に在住する光友ら約二百八十人の被災状況の確認にあたっている。これまでに連

絡がとれたのは約百十人。まだ半数以上の人の消息が不明で、一燈園同人らが被災地に入り確認を急いでいる

▽同園では被災者の救援活動として、乳児をもつ母親および児童をもつ家族の受け入れを行っており、これまで兵庫県民センターやNHKなどを通して呼びかけを行ってきた。また燈影学園への転入生には授業料免除などの措置が取られている。問い合わせは一燈園（京都市山科区四宮）＝電話〇七五（五八一）三一三六＝まで

▽一燈園全国光友会（丸橋博行当番）では救援基金への協力を呼びかけている。寄託時に次の二つの方法のいずれかを指定のこと。1 一燈園でまとめ、NHKを通して被災地の自治体へ届ける 2 家屋を失った光友への見舞金に充てる。送金は郵便振替〇一〇二〇－三－二一八七五まで

▽燈影設計工務代表で一級建築士の資格をもつ境本部長は一日から三日まで、京都府の建築士協会の要請で、宝塚市逆瀬川一帯の一戸建て住宅の危険度判定にあたった。また(株)ダスキンから参加した本年第一回の智徳研修会の研修生約七十人も「二日、西宮市の要請を受けて被災地に入り、終日、救援隊として現地の掃除を行なった。作務衣姿の研修生らは同日午後五時過ぎ、一人々々が大きなゴミ袋を手にして一列にならんで帰園し、西田多戈止一燈園当番をはじめ同人らの出迎えを受けた＝【写真は省略】

▽西田当番は地震のとき宮崎にいたとのこと。予定を早めてその日の夕刻に関西へ戻り以来、救援活動に追われている。一月十九日にはJR甲子園口から自転車を駆って芦屋市内に入り、一軒々々家を訪ねて光友の安否を確認して回った。今回の地震にあたって西田当番は、こうした救援活動とともに、一燈園生活創始者の西田天香氏が大正十二年の関東大震災の際、「天華香洞録」（天香氏の日誌）に著わした「『さんげ』と『いのり』－関東大震災『三重大願』－」等の文章を同人らと読み返しているという。西田当番はこの中の「しなぬいのち」（死なぬ命）という天香氏の言葉をあげて、「被災された方はいへんお気の毒だが、今回の地震をどう受けとめるか。この機会であれば学べないものがある」「人間はいずれ死ぬ。また自然の立場から見れば地震も当然、起こること。人間の立場ではなく、自然の立場にたって“自然との共生”をはかる命が『しなぬいのち』です」と語る。西田当番がこれまでの救援活動を通して実感したという、一燈園光友の前向きな「強さ」に、光友に息づく天香氏の精神を垣間みることができるようだ。「『さんげ』と『いのり』」の一部を今、読み返してみると－「『おひかり』のまへに、ひれふして、／つつしみて、おねがいがあります。どうぞ、このたびの、だいしんさいについてたてました、『わざわいをさいわいとする三つのだいがん』をおまもりください。／あまりにおおきな、だいがんでありますが、ひととして、こくみんとして、またじんるいとして、どうしてもたてねばならんがんであります。このきかいにたてねば、わがくにはあぶなく、また、せかいのへいわをつくりだす、ふかいいのりをするには、もつともよいきかいであるからです。／こんどほどの、おおきなさいなんは、わがくにのまへのれきしにみないそうです。わたくしはこれはわがくにに、れきしをこえるほどの、おおきな、いぎある、とうといことをさせようとの、おんためとしんじます。／わたくしたちは、ひととして、あまりにけってんがおおい。こくみんとしても、またじんるいとしてもです。それをふかくはつきりとしりました。こうしてふかく、さんげをして、このわざわいをうらかえして、おおきなさいわいと、したいのであります」「どうぞ、わたしたちが、しょうじきに、すなおに、けんそんに、このたびのことをてんのおんいましめとうけまして、こころと、からだと、せいかつとを、ただしくもたせてくださいませ。そうして、たてました三つのがんをおまもりください。けんめいにおねがいたします。／どうぞ。四とうり（ものもたずにおひかりのみちをあゆむみち、ものをあずかつておひかりをうけていくみち。ひとりゆくみち、せわをするみち）のざんげのせいかつを、とおしまして、／一、こじんとしましては、しなぬいのちをえますように。／二、こくみんとしましては、こわれぬところにざいもつをたくわえ、たのしく、がしんしようたんして、ちじょうにも、こんどのそんがいにますたからをあましえるように。／三、じんるいとしましては、こんぼんよりうらみあわせぬせいかつをなし、てっていしてあいしきれるところをもち、ひろげてせかいにささげ、たてにも、よこにも、あらしいあわずに、りそうのせかいのじつげんにちかずきますように」－。

新宗教

総裁、見舞いの手紙送る

●**修養団捧誠会** 「兵庫県南部地震による死傷者は幸いなことにいないようだ」。七日までに同会本部（東京都豊島区池袋本町）が把握しているところでは、被災地域百四十三所帯、四百六十九人の会員について、家屋が倒壊したところはあるが、死傷者は出ていない。しかし、家屋倒壊がどの程度なのかなど詳しい被災状況はまだ分からない状態だという。大阪、芦屋、神戸に支部があるが、現地から十分な情報が入らないこともあり、出居茂副総裁が六日、被災地へ赴いた

▽地震発生の翌一月十八日、同会は全国ブロック長へ宛てて、義援金募集の依頼を各支部へするよう通知した。また同月十九日には大阪、芦屋、神戸の支部会員へ出居菊の総裁が書いた見舞いと激励の手紙を送り、さらに同月二十日、全国の支部へ義援金募集の文書を送付した。現在集めている募金は二月末にいったんとりまとめ、被災した会員のために使うことにしているという。

(c) 1995中外日報社(デジタル化：神戸大学附属図書館)